

わが身、父方の祖母の家を伝へて、久しく彼の所に住む。其後縁欠けて身おとろへ、しのぶかたがたしげかりしかど、つひに屋とゞむる事を得ず。三十余りにして、更にわが心と一の庵をむすぶ。是をありしすまひにならぶるに、十分が一也。居屋ばかりをかまへて、はかばかしく屋を作るに及ばず。わづかに築地を築けりといへども、門を建つるたつきなし。竹を柱として、車を宿せり。雪降り風吹くごとに、あやふからずしもあらず。所、河原近ければ、水難も深く、白波のおそれも騒がし。すべてあられぬ世を念じ過ぐしつゝ、心を悩ませる事、三十余年也。其間折々のたがひめ、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出て世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官禄あらず、何に附けてか執をとゞめん。むなしく大原山の雲にふして、又、五かへりの春秋をなん経にける。

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りをむすべる事あり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蚕の繭を営むがごとし。是を中ごろのすみかに並ぶれば、又百分が一に及ばず。とかくいふほどに、齢は歳々に高く、すみかは折々に狭し。その家のありさま、世の常にも似ず、広さはわづかに方丈、高さは七尺がうち也。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて作らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継目ごとにかねをかけたり。若し心になはぬ事あらば、やすく外へ移さむがためなり。その改め作る事、いく

ばくの煩わづらひかある。積つむところわづかに二両、車の力を報むくふほかには、さらに他の用途ようどい
らず。今、日野山ひのやまの奥おくに跡あとを隠かくしてのち、東ひんがしに三尺余じやくの庇ひさしをさして、柴折しばりくぶるよ
すがとす。南、竹の簀す子こを敷しき、その西あかだなに閑伽棚あかだなを作り、北しやうじによせて、障子しやうじをへだてて阿弥陀
の絵像ゑざうを安置あんちし、そばに普賢ふげんをかき、前に法花経ほけきやうを置かけり。東きはの際わらびに蕨わらびのほとろを敷しきて、
夜の床ゆかとす。西南よるに竹のつり棚だなを構かまへて、黒かほこき皮籠がふ三合がふを置かけり。すなはち、和歌くわんげん、管絃くわんげん、
往生わうじやう要集えうじつごときの抄物せうぶつを入いれたり。かたはらに琴こと、琵琶びはおのおの一張いちやうを立たつ。いはゆる折琴せりこと、
繼琵琶つぎびはこれ也。仮かりの庵いほりのありやう、かくの如ごとし。

その所のさまをいはば、南いにかけひあり。岩いはを立てて水をためたり。林いの木近つければ、爪木つまぎ
を拾ひろふに乏としからず。名おとを音羽山おとはやまといふ。まさきの葛跡かつらあとうづめり。谷やしげれど西さいはれた
り。観念くわんねんのたよりなきにしもあらず。春はるは藤波ふぢなみを見る。紫雲しうんのごとくして、西方さいほうにほふ。

夏なつは郭公くわくこうを聞きく。語ことらふごとに、死出しでの山路やまちを契ちぎる。秋あきはひぐらしの声耳こゑみみに満みてり。うつ
せみの世よを悲かなしむほど聞きゆ。冬ふゆは雪ゆきをあはれぶ。積つり消きゆるさま、罪障ざいじやうにたとへつべし。若も
し念仏物ねんぶつうく、読経よみぎやうまめならぬ時は、みずから休みやすみ、身みづからおこたる。さまたぐる人も
なく、又恥はづべき人もなし。ことさらに無言むごんをせざれども、独ひとり居をれば、口業くしごふををさめつ
べし。必ず禁戒きんかいを守まもるとしもなくとも、境界きやうがいなければ、何なににつけてかやぶらん。若あし跡あとの白波しらなみ
にこの身をよする朝あしたには、岡おかの屋やにゆきかふ船ふねをながめて、満沙弥まんしゃみが風情ふぜいをぬすみ、もし
かつらの風、葉はをならず夕ゆふには、尋陽しんやうの江えを思おもひやりて、源都督げんととくの行ゆひをならふ。若よし余興よきよう
あれば、しばしば松まつの響ひびきに秋風樂しゅうふうらくをたぐへ、水みづの音ねに流泉りうせんの曲きょくをあやつる。芸芸はこれつ

たなければども、人の耳をよるこぼしめむとはあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みつから情をやしなふばかりなり。

又、ふもとに一の柴の庵あり。すなはちこの山守がをる所也。かしこに小童あり。時々来りてあひとぶらふ。若しつれづれなる時は、これを友として遊行す。かれは十歳、これは六十、その齡ことのほかなれど、心を慰むること、これ同じ。或は茅花をぬき、岩梨をとり、零余子をもり、芹をつむ。或はすそわの田居にいたりて、落穂を拾ひて穂組を作る。若しうらゝかなれば、峰によちのぼりて、はるかにふるさとの空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。歩み煩ひなく、心遠くいたる時は、これより峰つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、或は石間にまうで、或は石山を拝む。若しは又粟津の原を分けつゝ、蟬歌の翁が跡をとぶらひ、田上河を渡りて、猿丸大夫が墓をたづぬ。帰るさには、折につけつゝ、桜を狩り、紅葉を求め、蕨を折り、木の実を拾ひて、かつは仏に奉り、かつは家づととす。

若し夜しづかなれば、窓の月に故人をしのび、猿の声に袖をうるほす。くさむらの螢は、遠く槇のかざり火にまがひ、暁の雨は、おのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろと鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近くなれたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は又、埋み火をかきおこして、老のねざめの友とす。恐ろしき山ならねば、ふくろふの声をあはれむにつけても、山中の景気、折につけて尽くる事なし。いはむや、深く思ひ、深く知らむ人のためには、これにしも限るべからず。